

京都府地震被害想定調査委員会 第1回地震動予測部会 議事概要

1 日 時 平成18年3月7日(火) 9:30~10:45

2 会 場 キャンパスプラザ京都 2階 第1会議室
(京都市下京区西洞院通塩小路下ル)

3 出席者 別添委員名簿参照

4 議事要旨

(1) 事務局説明

○資料に基づき、事務局から説明

- ・各地域において、最大の震度をもたらすような震源活断層を設定する。
- ・地盤モデルを、堆積盆地(平野)の状況に応じて3種類に区分して作成する。

赤：基盤岩深度が深い地域(府南部地域を想定)

→詳細な3次元地盤モデルを作成

黄：基盤岩深度が中程度の地域(中北部の堆積盆地・堆積平野を想定)

→簡単な地盤モデルを作成(区分的水平多層近似モデル)

緑：基盤岩深度が浅い地域(山間部を想定)

→第1層のみの地盤モデルを作成(表層1層近似モデル)

(2) 各委員の意見

○震源断層モデルについてアスペリティの設定を考えた場合、仮定の仕方によっては被害予測が何種類か出てくることが考えられる。府民にどういう受け取り方をしてもらうかの方針を決めておく必要がある。

○全国の主要な活断層として国が選定している98断層以外にも京都府域には大きな被害をもたらす断層があるかもしれない。今後、どの断層を震源断層として取り扱うか検討が必要である。

○京都府では過去に大きな被害を及ぼしている地震があり、その地震について詳細な資料が多く残っている。地震の被害想定を行う前に地盤条件等を考える上で重要な項目となるので、歴史地震について検討が必要である。

○地盤モデルを250mメッシュで作成する場合、平野部では問題ないかもしれないが、山間部では250mメッシュより細かく設定する必要がある、検討が必要である。

高度な手法を用いるのであれば、それなりのデータが必要。府南部ではデータの蓄積があり、1年程度かければそれなりの地震動予測が可能かと思うが、府北部、府中部については地下構造がほとんど判明していない状況であり、現在のまま地震

動予測を行うことには危惧を感じる。ある程度時間がかかっても、資料の収集に時間をかける必要がある。また、対象断層の選定する際の検討にもある程度時間が必要であり、現在のスケジュールで想定を行うことは難しいと考える。

- それでは、赤だけ検討するのに1年ほど経過することが予想され、形を整えるために黄、緑の検討を行ったとしても地域によって検討内容に大きなギャップが生まれ、本来必要とされる検討項目が満たされないことになる。むしろ、詳細なモデルを作成せず、精度を落としてでも府全域を見た想定を行うという選択肢もある。

いずれにしても、想定の高精度化に走ってデータを蓄積しなければ、次の更新時にも同じような状況が起きるため、この被害想定を行うにあたっては、地域のデータが蓄積されていくことが重要だと思う。

- データの収集を行う際には黄の検討を行うこと前提に収集することが必要である。地震波形を作って震度に変換する作業を緑のベースでやってもかえっておかしな結果が出る可能性もある。京都府の地形を考え、どの地域で重点的に耐震化を進めるかなど、条件をふまえて、たとえば山間部でもある手法を使えばあるサイト特性が推定できるといった手法論をいくつかたてて、その優先順位を決めてやれば、段階的に進めるのであれば、現段階で、高度な赤の手法を用いなくても、府全域を黄の手法で行うことも一つの策でないかと考える。

- 赤、黄、緑の3つがある中で、中越地震などのような中山間部、黄を重点的に行っていくスタンスなのか、3つとも行うか、予算との関係もあると思うので、スタンスをはっきりさせた方が良い。最も詳細な手法で全域を行えば理想的だが、そうも行かないだろう。

津波の影響度評価について実施方針が不明確なので、はっきりさせた方が良い。

<参考>

活断層	過去に地震を起こし、今後も地震を起こすことが危惧される断層
堆積盆地	地下の岩盤の上に土砂がたまっている盆地
基盤岩深度	地下に存在する岩盤の深さ
アスペリティ	断層面の中でより強く地震波を発生させるエリアのこと
地震波形	地震により発生する波（P波、S波等）を曲線で表現したもの